

## 平成28年度第2回北海道子どもの未来づくり審議会 議事録

日時：平成29年2月13日（月）18:00～20:00  
場所：かでの2・7 510会議室

### 開 会

#### 【子ども子育て支援課・森主幹】

それでは時間になりましたので、始めさせていただきます。

本日は、お忙しい中、ご出席いただきまして、ありがとうございます。

ただいまから、「平成28年度第2回北海道子どもの未来づくり審議会」を開催いたします。

議事に入る前まで、本日の進行を務めさせていただきます、子ども子育て支援課少子化対策グループ主幹の森と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、子ども未来推進局佐藤局長からご挨拶を申し上げます。

### 開会挨拶

#### 【子ども未来推進局・佐藤局長】

北海道保健福祉部子ども未来推進局の佐藤です。よろしくお願いいたします。

本日は、夕方からの開催となりますけれども、委員の皆様におかれましては、大変お忙しいところ出席を賜り、心からお礼申し上げます。

また、午後の子ども・子育て支援部会から引き続き出席をいただいております、松本会長はじめ委員の皆様には、お疲れのところと思いますけれども、引き続き、ご審議の方をよろしくお願いいたします。

国では「ニッポン一億総活躍プラン」策定後、初めての予算となります平成29年度予算におきまして、「新三本の矢」そして「働き方改革と生産性向上」に沿った施策に焦点を絞り「夢をつむぐ子育て支援」として、待機児童解消のための保育の受け皿の拡大や保育士人材確保のための総合的な支援対策をはじめ、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援の実施や仕事と家庭の両立支援の推進などの施策を展開し、「一億総活躍社会」の実現に向けた取組を進めることとしております。

道では、現在、新年度予算編成の大詰めを迎えておりますけれども、こうした国の事業も活用しながら、道政上の最重要課題でございます人口減少問題への対応の中で、重点戦略に掲げております「地域ぐるみの『結婚・妊娠・出産・子育て』サポート体制づくり」を進めまして、結婚や出産、子育ての希望をかなえる環境づくりを目指し、集中的な取組を進めていきたいと考えております。

本日は、昨年8月と12月に開催しました子ども部会からのご意見を取りまとめた提言書の案、それと松本会長が北大で中心になって進めておりますけれども、北海道大学の研究チームと共同で取り組んでおります、子どもの生活実態調査の速報についてご報告させていただきます。委員の皆様にご審議いた

だいたいで、今後の施策推進に反映してまいりたいと考えております。

委員の皆様方におかれましては、それぞれのお立場から忌憚のないご意見を賜り、ご審議いただきますようお願い申し上げます。簡単ではありますが、開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

審議会成立宣言・日程説明等
---------------

**【森主幹】**

本日は、北海道医師会の藤井委員が所用で少し遅れていらっしゃるようになっております。それから、4名の委員が欠席されておりますが、現時点で、委員総数15名のうち10名の出席をいただいておりますので、北海道子どもの未来づくり条例第27条第2項の規定に基づき、成立していることをご報告申し上げます。

それでは、昨年12月に任期満了に伴いまして、委員の改選をさせていただきましたので、ここで委員の皆様全員のご紹介をさせていただきます。一言ずつご挨拶をお願いできればと思います。

北海道大学大学院、松本委員です。

**【松本委員】**

座ったままで失礼します。北大の松本と申します。教育学部というところに所属しておりまして、教育、福祉の問題について研究をしております。どうぞよろしくお願いいたします。

**【森主幹】**

札幌弁護士会の多田委員です。

**【多田委員】**

弁護士会から推薦をいただきまして委員になりました。弁護士の多田と申します。

私は弁護士会の方では、両性の平等に関する委員会という所に所属しております。その委員会では、特に子どもに関する権利については取扱いというのは詳しくはやっていないんですが、養育費の問題については、子どもの貧困に繋がる問題ですので、委員会としては力を入れてやっているところです。

仕事の関係では、最近子どもが4人とか5人とかいるお母さんからの事件の依頼を受けることが多く、その方々はだいたい生活保護を受けています。やはりひとり親だと生活が困窮するケースが多いですので、この審議会では、そういった経験について反映できたらと思っています。よろしくお願いいたします。

**【森主幹】**

北海道社会福祉協議会の富田委員です。

**【富田委員】**

北海道社会福祉協議会の富田でございます。

私は職場の中では福祉人材部を所管していきまして、福祉人材センターですとか、あるいは社会福祉研修所ということで、社会福祉従事者に向けての研修事業などを所管しております。

私の所管しております福祉人材センターでも福祉人材の確保ということが非常に深刻な問題になっておりまして、これから保育の部分でも人材の不足ということも予想されておりますので、私どもの所でも人材確保に努力していきたいと考えております。今後ともよろしくお願ひいたします。

**【森主幹】**

北海道青少年育成協会の猪股委員です。

**【猪股委員】**

皆様お疲れさまです。北海道青少年育成協会の猪股と申します。

我々は青年団という中で、道内各地、全国各地に団体がございまして。この役割としましては、地域の担い手を育成していこうということ、そして、青年達の意見をうまくまとめることができない方や生活で悩んでいる方々に対する支援などを行っております。

私自身も、まだまだ若い者ですが、やはりそういう方たちの観点を含めて今回審議して行ければなと思ひます。よろしくお願ひいたします。

**【森主幹】**

北海道保育協議会の亀井委員です。

**【亀井委員】**

北海道保育協議会で副会長をしております。亀井と言ひます。

函館で平成4年から保育園の園長をしております。どうぞよろしくお願ひいたします。

**【森主幹】**

北海道私立幼稚園協会の川島委員です。

**【川島委員】**

皆さんこんばんは。事前に皆さん方にお送りされている名簿の中では、私、副会長になっていましたけれども、やっと、今日の資料を見ますと、会長に、幼稚園協会の会長に昇格してあります。

よろしくお願ひいたします。

**【森主幹】**

子育てひろば全国連絡協議会の山田委員です。

**【山田委員】**

こんばんは。NPO法人子育てひろば全国連絡協議会の理事をしております。山田と申します。よろしくお願いいたします。

子育てひろばというのは、厚労省の地域子育て支援拠点事業で、そちらの方の全国のネットワークだとか、ガイドラインの策定だとか、研修など、全国に出向いて、行っております。それから、地元の札幌では、子育て応援かざぐるまというNPOに所属しております。昨年6月で30周年を迎えました。そちらでは、各家庭に出向いての訪問の保育、産前産後のサポート、それから、円山で地域子育て支援拠点「てんてん」という親子の居場所づくりを行っております。2歳児の森の幼稚園など幅広く活動しております。私自身は、幼稚園教諭と保育士の経験があります。

よろしくお願いいたします。

**【森主幹】**

北海道経済連合会の稲葉委員です。

**【稲葉委員】**

北海道経済連合会の稲葉です。

私の所属する部署は、労働政策局という所に所属しております。まさに所属の字のごとく、労働政策全般に係る仕事をやっております。どうぞよろしくお願いいたします。

**【森主幹】**

日本労働組合総連合会北海道連絡会の内藤委員です。

**【内藤委員】**

みなさんこんばんは。連合北海道の内藤と申します。

私は働く者の立場からということで意見反映をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

**【森主幹】**

公募委員の五嶋委員です。

**【五嶋委員】**

皆様、初めまして、公募委員の五嶋と申します。

活動としてはNPOの市民活動団体として、北海道ネウボラというものを主宰させていただいております。私には10歳と7歳の子どもがおりまして、乳幼児期に大変だったということも踏まえて、今、若いお母さん達からの声を集めたりするような活動や大学の先生達に集まっていたりしての研究会などを開催させていただいています。切れ目のない妊娠期からのワンストップの相談窓口ということで、今、よくニュースなんかでも流れるようになりましたが、モデルになるネウボラについて、市民の皆さんと勉強していけるような活動をしたいと思っております。

こちらでもいろいろ勉強させていただいて、お話などもさせていただけるとありがたいです。どうぞよ

ろしくお願いいたします。

**【森主幹】**

本日は、欠席となっておりますが、北海道民生委員児童委員連盟の梅田委員、北海道小学校長会の久葉委員、北海道町村会の池部委員、公募委員の遠藤委員、以上、15名の委員となっております。

また、委員改選に伴う会長の選出につきましては、先日、会議での互選に替えて、文書で皆様のご意向を伺いまして、松本委員を会長とさせていただきます。

それでは、松本会長から一言ご挨拶をいただきます。

**【松本会長】**

改めまして松本でございます。

会長をせよというふうな仰せですので、務まるかどうか不安ではございますけれども、精一杯やりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いをいたします。

専門は子どもの福祉に関することを中心にしながら、福祉と教育に何ができるかということを考えている立場です。それで、先ほどの夕方の部会でも申し上げたんですけれども、この審議会で扱うようなことで、例えば、保育の問題にしても、この後報告があります子どもの貧困の問題にしても、大変関心を集めている、世間からも注目を集めている分野だと思います。たまたまそうだと言うよりも、やはり、子どもを育てるあるいは子どもが育っていく道筋をどう考えたら良いのかということは、社会全体の関心事になってきていて、そのことは大変広く議論されるようになってきたことの証だと考えております。そうした中で、この審議会として、どういう議論ができるのか、あるいはどういう形で道民の皆さんにメッセージを発して、また、政策的な貢献ができるのかということが本当に問われていると感じております。

たまたま、厚生労働省の審議会と札幌市の審議会の両方に委員等の立場で出ておまして、どこでも同じようにそれぞれの立場から、やっぱりここが施策の変わり目だというふうに議論しているところだと思います。厚労省の方では、児童福祉法改正の全面施行がこの4月でありますし、札幌市の方も子どもの貧困の調査について、今取りまとめをされて、来年度は計画を立てられるというところだとなっております。なので、我々、北海道の審議会としても、こうしたタイミングに、きちんと、どういうふうにメッセージを出していけるかということを念頭に置きながら、ぜひ活発なご意見をいただければというふうに考えております。どうぞよろしくお願いをいたします。

**【森主幹】**

ここで、本日の配布資料の確認をさせていただきます。

既にお手元にお配りをしていますけれども、会議次第、出席者名簿、配席図、論点整理表。資料1といたしまして、北海道の少子化に関する提言。資料2といたしまして、子どもの生活実態調査についてを配布させていただきます。

続きまして、本日の会議の日程を申し上げます。

本日は、審議事項として、「副会長の選出について」、「平成28年度子ども部会の審議結果及び知事

への提言について」、「子どもの生活実態調査について」の3本の議事を予定してございます。

なお、会議の終了時間は、概ね20時を予定してございます。

それでは、早速、本日の議事に入りたいと思います。

これからの進行は、松本会長にお願いいたします。

審議事項（1）
---------

**【松本会長】**

それでは、本日はお手元の資料にありますとおり、審議事項が2件、報告事項が1件あります。まず、初めの審議事項、副会長の選出についてであります。

「北海道子どもの未来づくりのための少子化対策推進条例」の第26条第2項に「会長及び副会長は、委員が互選する。」と規定されておりますが、会長は私がお指名を受けましたけれども、副会長について何かご意見ご推薦等いかがでしょうか。

特にご意見がおありでないようでしたら、私の方から、ご推薦申し上げたいと思います。

学識経験者として少子化対策等に幅広い見識をお持ちである多田委員に、副会長をお願いしたいと思います。皆様いかがでございましょうか。

（拍手）

ありがとうございます。

それでは、多田委員よろしくお願いいたします。

それでは、審議事項の1点目はよろしゅうございますか。

それでは、多田委員ご挨拶をお願いします。

**【多田委員】**

副会長という重要な役をいただきまして、今後、様々な観点から議論を進めて行きたいと考えております。よろしくお願いいたします。

**【松本会長】**

ありがとうございました。

## 審議事項（２）

### 【松本会長】

それでは議事の２点目に移りたいと思います。

「平成２８年度子ども部会の審議結果及び知事への提言について」ということで、お手元の資料１でございます。

これは、子ども部会の部会長を務めておられる富田委員からご説明をお願いします。

### 【富田委員】

はい。それでは座っての説明で失礼をさせていただきます。

では、お手元の資料１、中を開いていただきまして、１ページをご覧いただきたいと思います。私の方からは、これからの説明で、今年度２回の部会を開きました部会の時の様子と、具体的にまとめられました提言の内容につきまして、若干の説明をさせていただきますと思います。

１ページの「はじめに」にありますとおり、今年度は１７名の部会委員、内訳を申しますと、中学生８名、高校生９名という構成で部会を進めてまいりました。８月と１２月の２回にわたりまして、人口減少問題への対応としての少子化対策の推進ということを主軸におきまして、私達の希望がかなう北海道の姿というテーマのもとで、３グループに分かれて協議を進め、意見をまとめました。

２回の部会に携わらせていただいた感想としては、委員の生徒さん達が、本当に真剣に具体的に少子化対策ということを考えられていたことが一番印象に残りました。

また、グループにより討議の進め方ですとか着眼点は様々だったんですけども、共通した思いとしては、働きながら子どもを生み育て次の世代に繋いでいくという、しっかりとした意思があって、それに向けて、北海道という土台をしっかりと固めていきたいという、そういう願いが感じられました。そのため、少子化問題から発展して、経済それから雇用の活性化、人と人の繋がりづくりといったことにまで視野を広げての議論となりました。

１回目の部会では、委員それぞれの視点から少子化対策に関する課題を出し合ってまとめて、２回目の部会では、その具体的な対策を出し合うという形で討議が進められました。お手元の資料にはあまり詳しくは載せてはいないのですが、少し口頭で、グループ討議の時の各グループの特色ですとかを紹介させていただきます。

あるグループでは、子育てを０歳から成人に至るまでを時系列にして、その時期その時期に必要な対策のアイデアを並べて議論するという方法をとっていました。

また、別のグループでは、北海道の主に地方部の現状を踏まえて、町をあげた婚活イベントで晩婚化対策とするですとか、空き家を活用して高齢者施設と保育施設を融合させたような施設を作って、そこで安心して子どもを預けて働くといった具体的なアイデアを出し合って議論していました。

また、別のグループでは、北海道の農業に着目して、引きこもりがちで就職していないような人達に農業に目を向けてもらって、農家同士の人の繋がりのあるコミュニティに巻き込んで、農業をしながら子どもを生み育てるという方向に持っていくといったユニークなアイデアを出して議論しているグループもありました。

こうした3グループ様々な、それぞれの議論をとおして話し合いが進んでいった訳ですけれども、これら各グループの議論を踏まえて、提言として事務局がまとめたのが、お手元の資料の3ページ以降からになります。3ページ以降の具体的な提言の中に、今紹介したような各グループで出された具体的なアイデアですとか、そういったものが盛り込まれて、そこから導き出されたものが4つの提言にまとめられています。4つの提言それぞれについて、少し詳細を説明してまいりたいと思います。

まず、1つめの提言の詳細は4ページになります。1つ目の提言は「子どもが成長する間の、子育ての不安や悩みを解消する子育て支援の充実」ということです。狙いとしては2つ並んでおりますけれども、要約しますと、安心して子育てしながら仕事をして行ける環境の整備ということになるかと思えます。子どもを預ける施設の必要性ですとか、経済的な負担ということに関して、手立てのところに具体的なアイデアが示されています。働きながら子育てをするということで、オフィスのすぐ近くに保育施設を作るアイデアですとか、その他子育てが進んでいった時に、就学期に入っていった時の学費の免除ですとか給付型の奨学金などといった非常に具体的なアイデア、施策の提言が手立ての中に入っております。

そして、2つ目の提言が5ページになります。「不安なく子育てできるための経済力を確保する働き先や雇用の充実」ということになります。子育てをしていく上での就職、経済的な安定ということに着目した議論が交わされまして、そこから導き出されたものをここに盛り込んでいます。特に北海道の特色を生かした農業に関連させた具体的な施策ですとか対策ですとか、女性の就職支援、それから地方の活性化といったところにまで視野を広げて具体策が示されています。

それから、3つ目の提言ですけれども、6ページになります。「人と人がつながり、地域とつながりが深まることにより、子育てしやすい環境づくりを進める」ということが、3つ目の提言になります。子育てをしていく上で孤立しないための人と人の繋がりづくりということに目を向けた提言となっています。地方の現状を踏まえた空き家廃校の利用といったアイデアですとか、世代間交流もできるような保育拠点での子育てといった希望も出されて、それらが手立てのところに盛り込まれています。また、農業農家に着目したアイデア、それから、婚活イベントで出会いの場を作ることによって晩婚化対策とすることなども解決策として挙げられております。

それから、4つ目が7ページになります。「北海道の魅力、地域の強みを生かし、誇りや愛着を持って生活し子育てできる環境づくりを進める」ということです。北海道の魅力、強みを生かして北海道に住み、働き、子育てし、次の世代を紡いでいく。そのために、北海道の基盤を固めるということで、北海道の活性化に向けた具体策が挙げられています。

いろいろ議論が交わされまして、それらを集約をしてまとめてまいりますと、こうした4つの提言に今回は整理されました。全体的に2回の部会の議論を見ていますと、現実的に具体的に考えた生徒さんが多かった印象があります。また、自分の学校でアンケートを取って資料をまとめてきたりですとか、道外の過疎地の情報を調べてきた生徒さんがいたりですとか、非常にまじめに真摯に取り組んで下さった印象があります。さまざま議論が交わされて、生徒さんの議論が4つの提言に集約された訳ですけれども、4つの提言は、裏を返せば、議論に加わった生徒さん達が将来に向けて不安に思っていることなのかなとも考えられます。

この後、3月に高橋知事に提出される予定ですが、北海道の少子化対策の推進に寄与できる提言となるように、今回のこの審議会の場でも皆様からご意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくお



願いたします。

私からの説明は以上でございます。

**【松本会長】**

ありがとうございます。

時間の配分ですけれども、本日の終了予定がだいたい8時頃であります。もちろん議論を制限するものではありませんけれど、2つ目の議題に1時間ほど時間を割くと考えますと、この議題については、だいたい7時頃を目途としたいと考えておりますので、積極的なご意見を願いたします。また、進行についてご協力をお願いいたします。

今のご報告について、いかがでしょうか。

これは、この提言というのは、このスタイルで案として出されていますので、基本このスタイルで出されるということですね。形としては、ここで意見が出て、少しいろいろな事が、ここの意見というよりは出た意見で少し追加になることもあり得るということで、よろしいですね。

(事務局：はい。)

皆様、いかがでしょうか。

ちょっと進め方で伺っていいですか。3つのグループというのは、それぞれ議題を決めたのか、それとも、全体についてフリーに話すという形が取られたのですか。

**【富田委員】**

まず、第1回目の部会の前段で、基調説明的に、北海道の少子化の状況について道の担当から話がありまして、それを受けて、それぞれのグループに道の方がファシリテーター的に入りながら議論を進めていきました。

テーマ自体は、各グループ共通のテーマが与えられて議論が進んでいったのですけれども、それぞれのグループの中で議論が進むうちに特色が出てきて、1つのグループは、先ほど申しましたように、子育てを時系列で分析しながら必要な対策を話し合っていたりとか、あるグループは、北海道の特色ってなんだって言った時に、農業が盛んだという所で農業に着目して議論が進んでいったりということで、スタート時点は一つのテーマだったのですが、進め方はそれぞれのグループで違って、特色が出てきたというような状況でございました。

**【松本会長】**

ありがとうございます。

他、ご質問等いかがでしょうか。

じゃあ、私の方から、もう一ついいですか。時系列的に生まれた時から並べてみて、いろんな事を考えるというのは、とてもユニークでとても大事な方法ですけど、そうした方法をとったので出てきたようなこととは、例えばどんなことですか。ここでいうと、どんな所にそれが出てきているかなという気が思いながら聞いていたのですけど。

#### 【富田委員】

そのグループの出していたアイデアを具体的にお話しいたしますと、0歳から2歳くらいの年齢の辺りでは、働くお母さんの近くで保育できる環境が欲しいということで、これは都会を想定したような一つのアイデアだったのですが、オフィスビルの中に保育スペースを作っていくとすると、なかなか街中はスペースがないので、例えば、ビル型の保育園ということで、ビルの中に上に延ばしていく感じで保育のフロアをいくつも作って、オフィスの近くで保育をできるようにするのですとか、あるいは、保育園の送迎のために保育園バスを作るのですとか、幼少期ではそういうアイデアがあり、さらに進んで3歳から6歳辺りの年代になってくると、なかなか保育施設も少ない状況もあって思うように保育園に子どもを預けられない状況を踏まえた考え方として、保育園を小学校の校区のように地域を決めて、そこに必ず入れるというような形にしたらどうかというような、0歳から就学前の6歳までの時期については、保育ということを中心とした議論がなされていました。

それで、小中学校、高校と大学に進んでいくに連れて、給食費を無料にするのですとか学費を免除して、できれば給付型の奨学金を設けたらどうかですとか、そういう学費ですとか経済的負担を考えた対策のアイデアが出ておりました。

成人期に至る所では、女性の就職再就職のサポートですとか、保育に携わる人の人材不足を懸念して、保育士体験をしていただく機会を設けるのですとか、そういうことを通じて、保育に携わる人員を増やしていきながら環境を整備するといったアイデアがでたりですとか、子育ての年を追うごとに、そのようなアイデアを出し合っておりました。

後は、その議論の中でも、都市部、地方部を分けたアイデアを出したりですとか、その状況もこのグループの中では見られたような感じです。

#### 【松本会長】

他、いかがでしょうか。

はい、どうぞ。

#### 【山田委員】

1番の子どもが成長する間という所を読んでいまして、中高生の皆さんが、生まれてから20歳までをイメージしながら、それぞれの課題みたいなものを考えて文章を作ったということで、素晴らしいなと思っていたのですが、切れ目のない支援というところを、もう少し一層強めるといいですか強調するために「子どもが生まれてから成長する間」と、赤ちゃんの所からずっと成長する間っていうふうに、「生まれてから」という言葉が入った方が、よりイメージが膨らむと思いました。子どもが成長する間だけでは、すごく漠然として聞こえるかなというふうに思います。

【松本会長】

今のご検討いただければと思います。

他、いかがでしょうか。

はい。

【五嶋委員】

今、お話を伺ったんですけど、やっぱり、都市部と過疎地では、割と女性の働き方というのも変わりますし、保育の環境も違うと思うので、そういった所を切り分けて整理をされた方がよろしいんじゃないかと感じました。

【松本会長】

今の具体的には、例えばどんなような事が考えられますか。

【五嶋委員】

例えば、札幌で仕事場の近くで保育ができればということですけども、それまでに通勤時間ですとかも人によって違ったりもしますので、そういったところももう少し。

【松本会長】

もう少し過疎地のことも都市部だけではなくて、過疎地を念頭に置いた意見もあれば、ここの意見を反映させるというよりも、そういう意見が、子どもさんの議論の中ででていれば、取りまとめの所でご考慮いただければと思います。

他、いかがでしょうか。

また、私からよろしいですか。

少子化対策というと、どうしても子育ての話になるんでしょうけれども、子どもが親のことを語っている訳ですよ。子どもの話はでてこないんでしょうか。

例えば、自分たちの学校が、どういう学校だったらいいとか、日々どういことを自分たちが望んでいるとか、例えば、学校外の地域で子どもが暮らすにはどういことが必要かという、親を支えるだけでなく、子どもを直接支えるようなことも、とても大事な少子化対策の一つのポイントだと思うんですけども、そういう観点の議論というのはあまり出てこなかったのですか。なにか子どもが親のこと話しているような感じがして。それはそれで大事なんですけど、子どもが子どもの事を話しているようなことを、もう少し反映させることができないかなと思ったものですから。

【富田委員】

どちらかという議論の方向性としては、自分たちが親になって子どもを生き育てる時の理想的な環境づくりみたいな方向で議論されていたように思います。

後は、自分たちの、今現在の自分たちのという面では、お一人、高校生さんだったのですけれども、同じ学校の周りを見ても、奨学金のことですとか、現実的なところで非常にご苦労している話ですとか、そんなことを話されて、非常に現実的な面からお話をされている生徒さんが多かったような印象があります。

**【松本会長】**

他、いかがでしょうか。  
はい、お願いします。

**【川島委員】**

私も会長のおっしゃるように、ちょっと足りないなという気がいたしました。おっしゃる通りなのじゃないかなと思います。中学生高校生ですと、現場から感じると、ちょっと無理だというのが提案されています。

例えば、0、1、2歳をバスで送るというのは絶対に不可能です。大分昔ですけど、幼稚園も園児が減ってきているし2歳児を幼稚園に入れてみようということで計画的に、2歳児特区といことを、ちょっとやって見たんです。それで、1年経って、やっぱりだめだという文科省の通知があつて止めました。2歳児でもバスに乗って、今、幼稚園はほとんど送迎バスありますので、それを利用することを前提に考えた時には、ちょっと難しいなということと、私達、現場を見ている者から言うと無理があるなというのは、オフィスの、あるいはビル、駅前保育とか駅型保育という駅前にあるビルを使ってというものです。これもやっぱり難しい。なぜかという、やはり一番子どもが心身ともに成長する0、1、2歳の時に、我々で言う園地といいますか、遊ぶ場所がない、そういうことについては、いかがなものか。

やっぱりこの問題は、中学生高校生には難しいんじゃないか。私達が中学生ならどういふのを望んでいるか、0、1、2歳がどう望んでいるかじゃなく、中学生が、高校生が、自分が、これから親になる時に何を考えるかというふうなことを提案してもらえれば、私の方としてはありがたいなと思います。ちょっと難しいんじゃないかなと思います。0、1、2歳、中学生前の子どもを対象とした、どういふふうな形を取れば少子化を解消できるかということについては、難しいかなというふうに、私、ちょっと感じました。

**【松本会長】**

今、ここで出た意見の取り扱いですけど、もし、当日の議論の中で子どもさんの議論として、何か拾えるところがあれば反映していただくことと、次年度以降の議論の作り方ということも含めて、お心得いただければと思います。

私の方から、去年までの提言と、今年、特にここは強調される所だとか、変わったこと、変化と言いますか、あるいは、ずっと共通しているなというようなこと、何年か見ている、どういふふうになりますか。特徴みたいなことがもしありましたら、お願いします。

### 【森主幹】

ただいま川島委員からもご指摘をいただきましたけれども、やはり、中学生高校生のみなさんが具体的に子育てや少子化のことを考えるというのは難しいところがあるかと思います。

それで、例えば、結婚のこと、婚活パーティーのこととかも、今回でていますけれども、昨年度もそういった話題が出ていましたし、あと、子どもたち自らの体験としてインターネットの利用が、北海道の子どもたちは割と多いようで、そういう所で人付き合いができていないんじゃないかとか、話題の中では出るのですけれども、じゃあ各グループで提言を作っていくという時には、そういった子どもたちらしい話題よりは、どちらかというときちんとした、今見ていただいているような形でまとまっているというふうに思います。

ですので、松本会長にご指摘いただきましたとおり、来年度以降は、やはり子どもたちにどのように考えてもらうのか、どのように提言を生かしていけるのかということも含めて検討しなければいけないと思っています。

### 【松本会長】

もちろん、こういう機会に、自分たちが親になった時どうだろうかとシミュレーションして、いろいろと議論してもらおうと、それが、こちら側から見た時にどうかと思う所があったとしても、それは子どもなりにまとめてみることは、それはそれでとても大事なことだと思うんです。それと同時に、やっぱり子どもが子どもとして、楽しかったり、幸せだった時ってどんな時なのかなってことも、もう一つ大事な観点のような気がしますので、議論の設定の仕方みたいなことを、ストレートに、子どもの子ども時代のことについて意見をもらえると、やっぱりそれは大人がちゃんと受け止めなければならないという話になってくると思いますので、それは、次年度以降だと思います。今年度でも、もしそういう所で反映させられるところがありましたら、少しこの中にも入れていただけると、より説得力が増すのかなとは思っています。

他、いかがでしょうか。

はい、どうぞ。

### 【山田委員】

質問ですけれども、話合いの時にファシリテーターと申しますか、そういう役の方たちは入ってらっしゃいましたか。

### 【富田委員】

道の担当の方が1グループに1人つきまして、ファシリテーターと言いますか、まあ、議論の先導役というような形で1人ずつ配置されて、議論自体は生徒さん中心ですけれども、最初の進め方ですとかは道の方が付かれてサポートしていました。

### 【山田委員】

その方の入り方とかで、議論の進み方とか、もう少し、さっき松本先生がおっしゃったことが反映されるような展開みたいなことも可能なのかなと思いつつお話を伺いました。

【松本会長】

他にいかがでしょうか。

はい。

【五嶋委員】

質問ですけれども、グループ分けというのはどういう基準で選ばれたのでしょうか。

【子ども子育て支援課・阿部主査】

高校生ばかりにならないようにですとか、女の子だけ、男の子だけにならないように、それと、地域も14の振興局から集まってもらっていますので、地域が偏ってしまわないようにグループ分けをしました。

【松本会長】

他にいかがでしょうか。

はい。

【猪股委員】

3番でお聞きしたいというか実態があったので、そちらのご報告をしたいのですが、その中で婚活イベントと言うのが書いてあるのですが、我々、青年団の中でも、栗山町で婚活イベントをよくやっているのですけれども、地方だと段々顔なじみばかり集まって、ただの飲み会になってしまうというケースがあるみたいなので、今後、議論していく中で、ターゲットをどこに絞っていくのか、例えば、町内の中での婚活イベントにするのか、町外も巻き込んでの婚活イベントにしていくのかというだけでも、いろいろやり方とか、見せ方とかも変わってくると思うので、今後、もしそういう話が出せる場があるのであれば、議論していただければなと思いました。

【松本会長】

それは、この提言というよりは、ここ全体で今後ということですね。

他にいかがでしょうか。

私の方から質問いいですか。

これ、お母さんがという話が良く出ましたけれども、子どもさんの議論の中で、父親の話は出てきましたか。

【富田委員】

父親がという話は、各グループの協議内容を発表していただくのを聞く中では、特にお父さんがということで特化されたような話題は記憶にはあまりないのですけれども、ただ、その学費の負担の問題ですとか経済的な問題になると、自ずとお父さんも含めた両親の問題として語られていたのかなという印象

はあります。

【松本会長】

子育ての担い手は母親だけではなく父親もそうですから、そういうようなことで意見が出ていけば、何か反映させるようなことが可能性として合ったかどうかという趣旨の質問です。

【川島委員】

もう一ついいですか。相変わらずの4ページの話ですけれど、本当に、手立ての3つ目の丸とかは、私は、そういう考え方を、中学生高校生が持ったということは大変ありがたい、嬉しいなというふうに思います。やっぱり体験をするということは、ここでは保育士になっていきますけれども、幼稚園も入れてもらえればなお良いんですけど、それは余計ですけれど、要するに、そういう体験をするということは素晴らしい。

それからもう一つは、森主幹にも無理矢理お願いをして、昨年度、子育て支援員の研修会をやって欲しいということで、やってもらったんですけども、旭川も、それに同じように子育ての支援員、助手というお手伝いをする、資格はもちろんありませんけれども、研修をやっていきます。

それで、なぜ今こんな話をするかということ、旭川で、高校生に、ある私立高校に連絡をして、就職がなかなかない中で、幼稚園、保育園の助手、子どもと関わる仕事があって、資格は持てないけれども、研修を受けることによって、ある意味での準資格をもらえるんだよと言ったら、ものすごい来たんですよ、女性が。ですから、そういう人たちが、後に実態調査か何かで出るかも知れませんが、やっぱり、大学に行かしたいと、お母さんが思っても、経済的に大変だ、でも、そういう、子どもに接する職場に就きたいという人はたくさんいるということ、やっぱり大事にしたいという気がするのです。ですから、そういう気持ちを持っている子どもたちがたくさんいるということは、我々は、体験で幼稚園、保育園なりに行くような形を、輪を広げてあげることが必要なと思います。

そして、行政として、そういう研修を受けるという機会を多くとってもらえれば、これはちょっと語弊があるかもしれませんが、もっともっと、子どもが好きになるということは、幼稚園とか保育園を、結婚で辞めた人というのは、ほとんどが子どもを作りますので、今問題なのは、結婚しても子どもを作らないという人がいるので、それはどういう理由か分かりませんが、やっぱり、子ども好きだから子どもを作るかどうかはそれは分かりませんが、ただ、うちの退職した先生方はほとんどが3人くらい作っていますので、少子化を解消するのだとすれば、いろいろ意見も反論もあるかも知れませんが、私はそれも一つの手立てだと思いますので、こういう、中学生、高校生辺りに、そういうことを経験すること、体験することが大切だなと思いますし、そういう機会を我々が作ってあげること、やっぱり特化する必要があるのかなというふうに思いました。

【松本会長】

ありがとうございます。今のご意見は、提言書の中身を具体的に生かしていくために、どういうことが有り得るかという観点からのご発言だと思います。大変貴重なご発言だと重く受け止めます。

はい、事務局からどうぞ。

【永沼課長】

ありがとうございます。貴重なご意見をいただきました。今の話の中で、来年以降どうするのかという話もありましたので、今いただいた意見を参考にしたいと思います。

ちょっと振り返って話しをさせていただきますと、元々この子ども部会の設置については、子ども自らの意見を表明する権利を公使していただくことと、子どもの意見が適切に社会に反映される環境を整備すること、大きく2つの目的でやっております。

今まで10年、この部会をやっていただいて、子どもからの提言を具体的に施策にした事業もありまして、やはり貴重な意見でございます。今回もこれを見ますと、今、お話にあった、若者に保育士の体験や子どもとふれ合う機会を作るといったような所が少し具体的な話として出てきていますし、今決定するという訳にはいかないのですけれども、我々としても、10年間、子ども部会をやってきましたので、少し視点を変えて、少し提言を実践をするような場を、この子ども部会に作っていったらどうかという観点もございますので、今日いただいた意見を参考にしながら、少し企画をさせていただこうかなと思っております。よろしく願いいたします。

【松本会長】

ありがとうございます。

子ども部会は、せっかく子どもさんに集まっていたいでいるので、子どもじゃないと言えないといえますか、子どもの方が知っていることをきちんと吸い上げていくということが、大人の責任かなとも思います。

それと、子どもというよりは若者の視点、十代後半の若者の方たちの視点も大事にできるようなことがあると良いと思います。

また、施策に結びつけたものはきちんとアピールして行くべきだと思います。それは、子どもさん達へのフィードバックでもあるかと思っておりますので、フィードバックの点についてもご配慮いただければと思います。

他、いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。

特にご意見がなければ、ここで意見を、もう一度反映させられるところがあれば、反映していただいて提言書を作っていただければとおもいますので、そういうことで、提言書についてはよろしゅうございますか。

次年度以降の持ち方についてもご検討いただくことになるかと思っております。

それでは審議事項の2点目は終了したいと思います。



## 報告事項（１）

### 【松本会長】

報告事項でございます。子どもの生活実態調査結果の速報版について、事務局の方から説明をお願いします。

### 【子ども子育て支援課・相馬主査】

子ども未来推進局子ども子育て支援課、子どもの貧困対策を担当している相馬でございます。

座って、ご説明いたします。資料２の子どもの生活実態調査結果速報版に基づき説明させていただきます。

１、実態調査についてでございますが、この調査につきましては、札幌市さんと連携し、北海道大学さんの研究チームと共同で、市町村の協力を得ながら実施してまいりました。今回は、主要な項目について、速報値として整理したものでございまして、今後、最終取りまとめを行う予定としております。

２番、調査の実施についてでございます。（１）目的でございますが、子どもの貧困対策を効果的に推進するために実施しております。

（２）調査の概要でございます。調査の対象ですが、調査票の配布対象は、小学２年生、小学５年生、中学２年生、高校２年生としております。小学２年生を除く、小学５年生、中学２年生、高校２年生につきましては、親と子の双方から、調査票に答えていただいております。

調査内容についてですが、保護者の方では、健康状態、就労状況、収入、学歴、暮らし向き、制度の利用状況について調査をしております。子どもにつきましては、健康状態、生活習慣、学習、人とのつながり、自己肯定感などについて調査をしております。

調査方法につきましては、無記名によるアンケート方式です。関係する教育委員会を経由して学校を通じてお子様に配布し、保護者まで調査票を配布しております。実施時期につきましては、平成２８年１０月から１１月に調査票を配布し、回収しております。

実施地域につきましては、北海道総合計画の６連携地域としておりますが、道央地域では人口が集中し、また、広域であるため、空知と石狩、後志、胆振と日高で細分化しております。ご覧の１３の市町に調査票を配布し、アンケート調査をしております。

回収状況についてでございますが、小学２年生の保護者、調査件数、配布数ですけれども、２，７５５件に対しまして有効回答票数は２，２６１件、有効回答票率が８２．１％となっております。以下、小学５年生の保護者が有効回答票率７９．０％、小学５年生の子どもが７９．２％、中学２年生の保護者が７１．９％、中学２年生の子どもが７２．０％、高校２年生の保護者が７５．９％、高校２年生の子どもが７７．１％の有効回答票率となっております。

（３）の調査結果についてでございますが、今回は、経済状況、子育てについて、それから、制度等の利用状況について報告をさせていただきます。

以上が、調査内容の速報版でございまして、データに関しまして、かいつまんで説明させていただきます。

回収状況についてでございますが、今、申しましたとおり、保護者票が合計で７７．１％、子ども票が

合計で76.0%、合わせて76.6%の有効回答票率となっています。

回答者の属性でございますが、お子さんとの関係で、「母親」が回答者で一番多く90.6%となっております。世帯類型では、「両親世帯」が66.4%で一番多くなっております。ちなみに「母子世帯」、「祖父母同居の母子世帯」を合わせますと11.3%と3.9%、15.2%の結果でございました。

保護者の健康状態でございますが、「健康」と回答いただいた方が79.3%でございました。続きまして、子どもの健康状態等でございますが、「健康」と回答のございました率ですが89.3%となっております。「病院等を受診した方が良かったが受診させなかった(できなかった)」過去1年間の経験でございますが、子どもについては、「あった」が17.8%、保護者自身について「あった」が33.3%の報告の率となっております。

経済状況についてでございますが、家計の状況で「黒字」と回答いただいた方が28.3%、「どちらでもなくぎりぎり」との回答が43.3%、「赤字」の回答が23.8%となっております。過去1年間に経済的理由で、次の支払いができなかったことはあるかの設問につきましては、「電気・ガス・水道のいずれか」の回答が一番多く10.0%でございました。ちなみに「給食費」につきましては5.1%の結果でございます。続いて、過去1年間で親子揃ってキャンプや旅行に行ったかにつきましては、「行った」という回答が、小学2年生では81.0%、小学5年生では75.2%、中学2年生では58.8%とだんだん少なくなっております。

続きまして、就学援助でございます。「受けている」との回答が18.9%でございました。就学支援金の利用状況、高校2年生でございますが、受けているが71.5%でございました。奨学金の利用状況(高校2年生)についてですが、「受けている」が8.9%でございました。続いて教育の状況でございます。「塾や習い事に行っている」との回答が57.8%でございました。

続いて、子どもにどの段階まで教育を受けさせたいかについてでございますが、「4年制大学又はそれ以上」との回答が33.3%でございました。お子さんの高校卒業後の進路をどのように考えているかについてでございますが、やはり「4年制大学」が27.8%が一番多かったです。続いて、あなたは将来どの段階まで進学したいですか、こちらについては、子ども票の方から集計しております、高校2年生の子どもの回答では、「大学まで」が34.4%の回答でございました。続きまして、もしもお子さんが高校卒業後進学するとしたらお金の用意はどうしますかの設問につきましては、「奨学金を利用」が53.3%と一番多く、その他「教育ローンを利用」ですとか「目途が立っていない」との回答も17.6%でございました。

続きまして、子育てについてでございます。子どもについての悩みでございますが、一番多かったのが「子どもの学習や進路」でございました。「特に悩みはない」というのを除きまして、次に高かったのが「子どもの発達やしつけ」が17.8%でございます。悩みや困りごとを相談する相手の質問項目でございますが、子どもについての悩みを相談できる相手が「いない」が2.6%、保護者自身の悩みが「いない」については5.8%の数字となっております。続いて、日ごろ立ち話をするような付き合いのある人、そういう相手はいるかいないかの設問につきましては、「いない」が7.2%という数字となっております。

続いて、制度等の利用状況についてでございますが、情報を得るためによく参考にしてている媒体はなんですかという設問につきましては、「学校などからのお便り」が一番多く39.2%、続いて、「家族や友人」が25.2%でございました。続いて、相談機関や相談員に子育てや生活のことで相談した経験、

こちらにつきましては、「保健師」に相談した経験があるとの回答が17.3%でございました。なお、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーも合わせてでございますが、3.8%の数値となっております。

最後でございますが、各制度を利用した経験はございますかという設問につきましては、「児童扶養手当」が31.1%、「生活保護」が3.3%、これはこれまでに経験したことがあるかという設問でございます。

以上、データの方も合わせて、かいつまんで説明、報告をさせていただきました。

事務局からは以上です。

#### 【松本会長】

ありがとうございます。

先ほど、佐藤局長からのご紹介もありましたけれども、北大の方と道庁さんの方で協力してやっているということで、北大の方のチームのまとめ役というか代表をしているが、私ですので、私の方からも補足的にご報告したいと思います。

調査票自体は、10ページ位のかなりタイトのものであります。ですから、ここにでてくる質問は調査票のうちの一部であります。また、子どもの貧困の問題について議論しておりますので、所得だとかお金の所のデータがとても大事でありますけれども、現在の所はまだできておりません。その理由は単純でありまして、まだ、資料の整理が終わっていないということでもあります。入力には既に終了していますが、入力が終わってミスのチェックが終わって、もう少し資料を確認した後になります。

特に、所得データ等は、実額でお聞きしていますので、どう区分するかとか、あとは月額で答えておられる方とか、たぶん月額だとか、たぶん年収だとか、つじつまが合わないような所を整理していく作業が時間が掛かりますので、現時点では公表したとしても、後で修正をするようなことになるのが予想されますので、そういう心配のない時点で公表していくということでもあります。

本来であれば、所得で全体の単純集計ができて、家族類型別あるいは収入階層別に、所得データ等とのクロスがあって初めていろんな分析ができると思いますけれども、それはまだということでもありますので、途中の経過報告で、今のところ、これくらい作業が進んでいますという経過報告という形で了解いただければと思います。

もう一つは、札幌市さんも同じ調査を行っておりますけれども、札幌市さんの方も、たまたま私が責任者で、基本的に調査表は同じであります。北大の研究者も、札幌市さんの方にもほとんど同じメンバーに関わっていただいて、調査票は同じでやっております。札幌市独自のものがありますので、施策のところの利用状況について、お聞きするところは違うところがありますけれども、札幌市さんの方も同じ位のデータしか公表されておられません。先週の新聞に確か出ていたと思いますけど、それも同じ事情であります。いずれ、両方のデータがきちんと公表できるようになれば、比較等も含めてできるかと思えます。

それと、昨日の夜、NHKスペシャルで、子どもの貧困の問題について、大変良い番組が放送されました。あれも、大阪、東京あるいは千葉のほとんど同様のデータの紹介が主でしたけれども、東京の何かの研究者の方も共同してやっておりますので、いくつかの項目が東京、大阪などと比較できます。そういった比較も、これからの作業になります。

今の時点では、こういう形でのご報告ということになります。これだけでも、いろいろなことが見えて

まいりますけど、現在、資料の整理中でありますので、きちんとした報告といろいろな比較分析については、今後ということになることは、ご了解いただければと思います。

もう1つ、札幌市さんは2歳、5歳と若者をやっています。北海道の方は、2歳、5歳はまだですけども、行う予定で準備を進めております。次年度ということになるかと思います。調査表は基本同じということです。

補足と説明なんですけれども、全体の状況をご理解いただくためには、その方が良いと思って補足をさせていただきました。ですので、今の段階で、いろいろとご質問なり、ご意見をいただくということと、今後分析をしていく等々で、こういうことはどうだろうということに、自由にご意見をだしていただく場にしたいと思います。

ぱっと、データ、数字を見てもなかなか言いにくいなどは思いますけれど、例えば、出ているデータは、ほとんど札幌市さんと同じで、やや北海道さんの方が、いくつか札幌市以外のものが出ている状態です。

私もまだちゃんと見れていないのですけれども、ざっと見て、例えば、病院等を受診させなかった経験があるという方の子どもについてというところで、「あった」という方が、小2、小5、中2入れて17%位で、保護者自身というのは、もう少し多くて3割くらい。

実は、札幌市のデータを見ますと、2歳のところの保護者さんの受診抑制が高いんです。これがどういう理由によるものなのかということ、これからきちんと分析をしないといけないと思いますけれども、大阪、東京あたりがちょっと先に進んでいますので、今やられているデータで、所得データと重ね合わせますと、所得と連関しているというのが、先行地域では報告されています。そういう意味では、そのこと自体を取っても、大変な深刻な状況だなと考えています。北海道のデータでは、まだ分析ができません。

#### 【五嶋委員】

最近、三世帯同居の話題がありますけれども、一般的にシックスポケットという話もあって、シックスポケットという点で、祖父母の資産だとかの調査は、この中でなされていますか。

#### 【松本会長】

質問項目はないです。貯金がどの程度ありますというのはありますが、祖父母の資産という項目については入れてないです。たぶん、一般的なアンケート調査で聞いても、うまく実態がつかめるかどうかというのもちょっと分からないです。生活の実情を捉えるには大変重要な観点だと思います。

他にはいかがでしょうか。

#### 【川島委員】

6ページの悩みや困りごとを相談する相手というのは、もう少し詳細に、どんな人とかってというのは調査したのでしょうか。

#### 【松本会長】

はい、そこは複数回答でやっていますけれども、そこは回答にぶれがあったりするので、「いない」と

答えているところは、ほぼ数字が確定だろうというところで、こういう形でだしています。

**【川島委員】**

その次の所にも関連するのですけれども、幼稚園で悩みをどういう人に相談されますかというのと、幼稚園の場合は、両親、友人、幼稚園の教諭というような形でした。保育所で調査すると、保育士と友人と両親が同じくらいの割合だった。

ということで、子どもの未来づくりの審議会ですので、どうやれば、子どもの未来や、悩みをお母さん達が解消するには、どういう人達を配置すればいいのかという参考になるのかなということで、どういう人達と相談しましたかということ、ちょっと聞きたかった。あるいは、もし調査していないのであれば、今度の調査では、どういう人達と相談しました、相談します、それは誰ですか、というふうにやってみると、もう少し詳細でいいのかなと思いました。

それとやっぱり、情報を得るためによく参考にする媒体というのも、行政とかホームページのとか、いろいろありますけれども、やはり、学校からのお便りとか家族友人というのを足すと60%位になります。ですから、回答でもありますけれども、やはり周りの人、身内の人、そういう人たちが相談相手になっているのかなという気がしていますので、そのあたりをもう少し詳細に、うまく配置していけば、例えば、児相に相談をしましたかというようなことは5.5%とかです、行政の悪口になるので言いませんけれども、どうも敷居が高いのかなと思います。それなら、もうちょっと、ふわっとしている人達の方がいいのかなとちょっと結果を見て思いました。

**【松本会長】**

ありがとうございます。大変大事なご指摘だったと思います。

相談相手が具体的にどこかということと、後は、行政の窓口を、利用したこと、相談したことがあるかですけれども、もう少し詳細に質問項目がありますので、そう遠くないうちに、もう少しこの辺りも詳細な集計結果を公表できるのではないかと考えております。また、利用した時の評価がどうでしたかということも含めて。

はい、お願いします。

**【藤井委員】**

藤井と申します。産婦人科の医師で、病院の方では思春期外来を担当しています。北海道思春期研究会の幹事もやっております。このデータを見て驚きました。これは保護者さんに対する調査ですね。

**【松本会長】**

小2、小5、中2は子どももやっています。

**【藤井委員】**

最近、フェイクニュースとかが随分話題になっていて、巷で出ているニュースが、はたして真実かどうかというのはなかなか分からないのですけれども、学校の先生から見て、子どもたちが貧困かどうかと

第三者として見ると、たぶん2人に1人が貧困だろうというように、学校の先生は見ているんです。

けれども、実際に当事者達に聞くと、そういうのは、あまり、このアンケートからは出てこないように見えるんです。だから、ご本人達はこういったアンケートにそのまますんなりとそのまま真実を答えているのか、自分たちが貧困だとは思っていないのか、そこら辺のギャップもあるだろうと思いました。

あと、病院などを受診した方が良かったが受診させなかったというのは、おそらくこれは、心療内科とかそういった診療科ではないかと思えます。腹痛や熱ということで受診させなかったのでは無く、心の問題というようなことも、かなりあったのではないかなと思います。

やはり、先ほど、そちらの方がおっしゃったのですけれども、誰に相談するかって言った場合に、やはりカウンセラーだとか、そういった人には話すけれども、なかなか親には話さないとか、そういった偏りも出てくると思うので、この審議会では、できるだけそういったフラットな形でお話を聞く専門家が必要だという形で流れていかなきゃいけないのと、はたして、こういう調査が、本当に真実を反映しているかどうか、そこら辺がちょっと、印象としては、びっくりしたデータだったのですが、いかがでしょうか。

#### 【松本会長】

具体的にどこにびっくりされましたか。

#### 【藤井委員】

先生達から見た2人に1人は貧困である、例えば、着ているものがとても汚れているとか、それから、ご飯をひよっとしたら食べてないんじゃないか、朝食を食べてないんじゃないかとか、そういった背景を推察すると先生達はそういうふう考えている。

この結果を見ると、就学支援金の利用状況で「受けている」のが71.5%。高校生で71.5%の子が就学支援金を利用している。それから、就学援助も、小、中、合わせると、だいたい18%、中学校の2年生では22%が利用している。5人に1人も就学援助を受けているのにも関わらず、塾や習い事に6割くらいはちゃんと行って、それから、子どもたちには高等教育まで受けさせたいというのが「大学くらいまで」が4割。全体で見ると、確かに33%が4大制でそれの前、短大とか専門学校ですけれども、高校以降、足してみると50%以上は進学させようとしている。

しかしながら、就学支援金が7割も受けていて、そこら辺は支援金を受けていながら、さらにその所まで行かせたい、あるいは行きたいと思っているのか、具体的にそれを本当にクリアできるんだろうか、自分たちはどのように思っているのだろうというのが、聞いて見たかったとすごく思いました。

#### 【松本会長】

おっしゃっている意味が分かりました。

大量の自計式アンケート調査ですので、質問そのものが細くなればなるほど答え難いということになりますので、こうした形式でのアンケートで分かる事の限界があると思います。だから、そこを踏まえながら、きちんと分析をしなければならないなと思っております。

回収率が7割強から8割で、予想より、一般的なこういうものより、かなり高い。それに10ページのアンケート調査で、子どもも10ページくらいあって、それぞれ、かなり時間がかかるにも関わらずかな

り高いということは、それだけ、こういう問題に、皆さん関心があるんだらうということは、ひしひしと感じているところであります。

もう一つは、自由記述欄がありますので、その所にかなりお書きになられている方がいらっしゃるのので、この分析もきちんとやっていかなければいけないなどは思っております。

#### 【藤井委員】

逆に言うと2割の人達が、お母さん達が、答えてらっしゃらないという所に、たぶん、問題の貧困が集中しているのではないか、そこら辺の声をどういうふうに拾い上げたら良いのかなと思います。回答してくれる人は良いけれども、回答しない人達の集団がかなり問題に陥っているのではないかと思います。

#### 【松本会長】

これはアンケート調査の宿命みたいなものですね。ただ、札幌市のデータもそうですけど、小中学生で就学援助を受けているのが18%です。北海道は市町村で合わせなければならないですけど、札幌市データで見ると、全体の就学援助の受給率、利用率とほぼ変わらないです。近似しています。そうすると、就学援助の基準で見ると、その下の所がごそと抜けたということでもない。それはあくまで推計ですけど。後は、課税非課税の所も聞いていますので、課税世帯、非課税世帯の割率なりの比率で、一般的には低所得層の方が漏れやすいということがありますけれども、市町村の基礎データとどういう所が違うのかとか、札幌市データを見ると思ったほどでもないということはあるんですが、それは検証しなければならない。

ただいづれにしても、書く余裕のない人は書けないし、文字が読めて書く時間があるということが前提ですので、そういう限界を持っているものであることは、きちんと踏まえておく必要があるだろうと思います。

他、いかがでしょうか。

後は、相談相手ですけど、やっぱり、いないという人が確実に数%いるということが、とても大きなことだと思います。同じようなことが、北大の方で約10年前で同じ質問をした、北海道内の札幌市を含む調査のデータで出ています。なので、ここでは、まだデータを比較できないですけど、そのいくつかの質問について、10年、20年くらい前と比較ができますので、確実にいつでもそういう方がいらっしゃるということ、どういう方がいないと答えられているのかということは、ちょっと丁寧に分析をしなければいけないと考えています。やっぱり、漏れやすい層というのがいらっしゃるんだと、アンケート調査で見ただけでも思いますので。

後は、子ども票の方は、親の方を先行させていますので、まだですけども、子ども票の回収率も高いので、子ども票のデータも出ますと、子ども自身、特に中高生が、どんなふうな日常生活を送って、何を感じているかということが、もうちょっと、きちんとわかるかなとは思っています。

はい、どうぞ。

### 【藤井委員】

札幌市に若者支援総合センターというのがあります。退職した高校の養護の先生達が子どもたちの相談相手になっている第三セクターのセンターというのがありまして、そこからの依頼で私の所に受診する事例などをみると、生活保護を受けている母子家庭で、子どもはみな学校に行っていない。子どもの中には、なんとかして自分の貧困から自立をしたいと思っていて、お金を貯めたい。そして、家を出て自分で勉強をしたい。その為に、バイトをしているけれども、びっくりしたんですが、5万円働いたら、生活保護を受けていたら3万円だけは自分のものになるけれども、2万円は親御さんに出しなさいということになって、2万円を親御さんに出したら、2万円は生活保護が減額されるというシステムにどうもなっているらしいのです。そういう中で、彼女は、バイトをしても結局のところ生活保護が減額になるだけだから家の中のことをしなさいと、寝ているだけの母親から、子どもたちのご飯を作ったりだとか、そういうようなことを手伝いなさいと言われる。そういうような子たちが、私の思春期外来に来る訳です。

そういうようなお母さん達は、けっしてこういうアンケートには答えてらっしゃらない実態があつて、先ほどの、回収率が70%ですから2割3割は、本当に誰にも相談できない孤立した家庭がいっぱいあるんだろうと思うので、このアンケートはアンケートで素晴らしいものですが、これ拾い切れないものに対して、どういうふうに支援していったら良いか、それはまた別問題で有るだろうと思っています。

### 【松本会長】

大変貴重なご意見ありがとうございます。

こういうものの有効性と限界みたいなものが両方ありますので、真実を知る一つの方法があるというよりも、たくさんのもので組み合わせながら考えていくというようなことが大事ですし、それは、貧困問題の施策にしても、解決策の決め手があるというよりも、いくつかの柱になるものを組み合わせしていくという事じゃないと難しい問題だと、個人的には理解しております。

こういう形で、広くこれだけの規模でやったのは、札幌市も含めて初めてですので、そのこと自体は大きいと思います。

はい、どうぞ。

### 【川島委員】

今、会長さんがおっしゃったこと。初めてですか、この調査は。

(事務局：初めてです)

それじゃあ、参考にならないと思うのですが、ちょうど1ページの所に、調査内容の下から3つめの○ですけれども、自己肯定感というのがありましたので、ちょっと気になって、資料があるのかなと思ったら、ないのですけれども。今、子どもたちは、世の中に必要ないんじゃないかっていうふうな、どちらかというと前向きじゃない、そういう人たちが非常に増えてきている。それは、自己肯定感っていう事ですけども、親はどう思っているのか、子どもは、今どう思っているのか、私達の学校で調査しました



ら、やっぱり、子どもは夢を持っているのです。でも、親からみると、どうも、あんまり前向きでない、ぜんぜん積極的に物事に行動起こしてないというような親の目で見えていて、子どもはいや僕は世の中に必要だから、僕は頑張ってるよと言うのですけれども、その差違っているか、そういうのも知りたいとちょっと思いました。

今の子どもたちの考えというのはちょっと微妙なので、外向けは非常に良いんだけど、内の中に入っている気持ちというのは外に出していないという子どもたちがいるのではないかなという気がして、せっかく調査していただけるのであれば、ここに書いてあったので、出てはいるのですね。この表には出てないだけで。肯定感ということですから。

#### 【松本会長】

肯定感という言葉で呼ぶのが正しいかどうかは、研究者の立場から言うと、いろいろな議論があるのですけれども、子どもの自己感覚のようなものは、いくつか尺度を引いています。単一の質問というよりは、いくつかの組み合わせで見ないとまずいだろうと思います。親御さんの方については、よく使われる抑うつのスケールでお聞きしているということで、単一の質問で結果を出していくというよりも、全体的に見てどういう傾向にあるかという形で出してくるべき資料かなと思っています。

#### 【山田委員】

札幌市で、2歳、5歳の調査の結果が出ていて、道の結果も、すごく楽しみにしていたので残念だなと思ったら、この後、次年度以降調査されるという事だったので、すごく期待しています。

3ページの所の世帯類型ですが、今、ひとり親が本当に増えていて、ひとり親の世帯の生活の大変さみたいなことが、いろんな所で取り沙汰されているのですが、計算してみると母子世帯と父子世帯を合わせると18.1%になって、本当に2割に近くなっているんだということを実感しました。

先ほど、相談というところでは、年齢別の親の回答の集計ということでしたけれども、ここの所も、たぶん、ひとり親というのが後から出てくるのかなと思うのですけれども、本当に地域の中で孤立して働きずくめで、親も子どもも大変だという状況があって、この前、子育て支援団体のネットワークで交流会があった時に、自分たちで、そのことをなんとかしていきたいと語っていた団体があったんですけれども、なにか、この段階でも早急にできることを、施策の方に生かしていただけたら良いと感じました。

#### 【松本会長】

他に、いかがでしょうか。

これから集計分析が進んで、そこでも、いろいろな議論をいただくことになりますので、それに向けて、いろいろご発言いただきたいと思います。

私、個人的に思うのですが、こういう調査というのは、結果を見て、それをただ見渡すのではなくて、結果を見て議論できるところが、こういうのが出ると議論しやすいし、いろいろ議論できるということが、もう一つ、大きな役の立ち方かなとも、個人的には思っております。そのようにして、みんなで議論できる材料をどんどん出していくというのが、大事なことかなと思っています。

はい、どうぞ。

**【五嶋委員】**

一番最後のページになるのですけれども、相談した結果などは、詳細の評価がこれからあるという事なので期待しているのですけれども、その上の方の、困りごとを相談する相手というパーセンテージが、私が思っていたよりもかなり低いもので、これは話すだけの相手がいるよということなのか、解決に至るために示してくれるような、導いてくれるような人がいるよということなのか、どちらになりますか。

**【松本会長】**

質問からすると前者ですね。なるべくシンプルな質問にしないと答えにくいので。個別的な事情は、やっぱりこういうアンケート調査ではなかなか捉えるのは難しいだろうと思います。そういう意味では割とシンプルな設問です。

**【五嶋委員】**

ありがとうございます。じゃあ、私は、夫に話すということになるので、そういった意味で、いるというふうになるんですね。悩みは消えないけれども相手がいるよということで。

**【松本会長】**

こういうデータと、後は、子どもさんを面倒を見てくれる人がいるかどうか、具体的なケアの所でも、同じような形で別のことで聞いているので、孤立の問題というのは、一つの質問だけでなく、いくつかの質問の結果を重ねて分析する必要があるかなと個人的には考えております。

**【藤井委員】**

学校の現場の方にお聞きしたいのですが、スクールカウンセラーというのは、これは義務付けではないですよ。各学校に必ず配置が必要だということではないですよ。

**【佐藤局長】**

ちょっと教育の者がいないのですけど、そうです。たぶん、これは文科省の方の予算で配置が都道府県ごとに決められていて、多くしようとすれば、都道府県で独自に予算を付けないとなかなか配置できないということです。各校に1人ということではなくて、どこかの学校に1人置いて、広域的に置いていると思います。

**【藤井委員】**

6ページ目の下から2番目の相談の対象ですけれども、ここに保健師というのがあるのですが、学校の子どもたちは、保健室登校をしたりだとか困ったことがあると、保健室に行って養護の先生に相談をするというような形で、いろいろな問題を養護の先生達にしているのですけれども、保健師が小学2年生で24%、高校生になると少ないですけれども、子ども達が保健師って書いてあるのですけれども、これはどこに配置された保健師ですか。

【松本会長】

これは、子どもが回答しているのではなくて、親への質問です。

【藤井委員】

そうすると、保健師さんというのは、その地域の保健師に窓口に行って相談をするということですか。

【佐藤局長】

そうですね。市町村の保健師だと思います。学校の養護教諭の場合、必ずしも看護師とか保健師の資格がある訳ではないので。

【藤井委員】

教員ですから。

【佐藤局長】

はい、そうです。

【藤井委員】

スクールカウンセラーというのが、非常にパーセンテージが少ないのですが、教育の現場で、スクールカウンセラーがどこにいるのか、なかなか分からないという親御さん達が結構居て、どこに、どういうふうにアクセスすると、スクールカウンセラーとお話ができるのっていうのが、よく出ています。そこら辺の周知というのも大事なというふうにごく思います。

【佐藤局長】

分かりました。教育の方の所管になりますけれども、伝えていきたいと思います。

【松本会長】

この調査は、教育委員会の協力をいただいていますよね。小中高は学校を通して配布をしているので、やっぱりこういう問題は、教育部局なり教育委員会が、きちんとこういう所に嚙むということがとても大事だと思います。どこが主にして進めて行くかは別にして、福祉の所と保健と教育の所がきちんと絡む形で、いろいろなことが進むということがとても大事だと思います。今のご発言はそういう観点でもとても大事なと思います。

他、いかがでしょうか。急に、限定的な資料でもこれだけであるので、もう少し、きちんと全体像が見えると、もっといろいろなご意見が出てくると思いますけれども。

はい、どうぞ。

### 【山田委員】

皆さんの方にお渡しした青い封筒に入っているのですが、私が関わっている全国子育てひろば全国連絡協議会の方で、拠点を利用する親に調査をしたのですけれども、自分で生まれ育った市町村で子育てしている人の割合というものをしました。全国で調査したのですけれども、自分が生まれ育った市町村以外で子育てした人というのは72.1%、自分で生まれ育った所で子育てしている人というのが28%くらいでした。私達は、アウェイ育児というふうに名付けて、本当に、今の子育てしている人の状況みたいなものをいろいろ発信していきたいというふうに思っています。

それから、横浜の新制度の時のニーズ調査で、あなたが子どもを生まれる前に子どもとふれ合う経験をしたことがあるかどうかというので、「ある」と答えた人は1/4でした。3/4の人が、子どもとふれ合う機会のないまま親になっているのだなということを感じたのですけれども、私も子育て支援を行って24年くらい経ちますが、つい十数年前は半分くらいかなと思っていたのですけれども、1/4という数字を見た時に、やっぱり、すごく、こうなんて言うんですかね、ここまで来たんだなっていうようなことを実感しました。

道の方では、どんなふうにその辺のところはなっているのかなと思ったものですから、これから乳幼児のところの調査をする時に、そのような視点も、孤立ということであったりとか、親の子育て経験みたいな、親になる前の子育て経験みたいなものも、もし可能であれば盛り込んで調査をしていただけたらいいなと思いました。

### 【松本会長】

どこをどう削るかなという話になっているので、親の子育て経験というのは、ちょっと盛り込む余裕がないというところです。ただ、大事な事だなというふうに思います。

もう一つ、居住地とか出身というのは、調査票の中に入っているのですが、そこはいずれちゃんと、引き続きの人なのか、よそから入って来た人なのかということについては、分析ができるかなと考えてます。

他、いかがでしょうか。

特にというご発言がなければ、時間も時間ですし、いったんここでこのご報告は終えたいと思います。ただ、本当にこれは、こういう集計作業をしていますという報告ですので、もう少しきちんとした資料が出た段階で、いろいろなご意見を伺うべきことだと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

よろしゅうございますか。

それでは予定された議事と報告事項は、以上でありますけれども、何か他に事務局の方でありますか

(事務局：ありません。)

はい、分かりました。

それでは、予定の議事が全て終わりましたので、これで事務局の方にお返しをいたします。

閉 会

**【金子主幹】**

松本会長、委員の皆様、本日は大変長い時間ありがとうございました。これを持ちまして、終了とさせていただきます。お気を付けてお帰り下さい。ありがとうございました。